太平洋戦争の激戦地、パラオ・ペリリュー島の奥地へ

探検部5人が「海外戦跡踏査」

行動計画書の備品のなかに、小さく「線香」とあるのが目に焼きついた。
川下りや秘境を行くアドベンチャーとは違うのだ。
過去という「既知」のなかの「未知」に出合うために、かつて戦争があったその現場へ。
「戦争を知らない」親たちの第2世代でもある5人が、
草むす山岳で遭遇し体感したもの、そして議論したものとは何だったか。

学生記者　西原香保里（経済学部3年）

毎日香

「やべえ、踏んじゃった」

佐相亮真（さそうりょうま）さん（商学部2年＝以下いずれも当時）は思わず声をあげた。足の裏に何か異物が。まだ本格踏査に入る前だ。「ほら、佐相の足元に、あるじゃん！」と言われておそるおそる足元を見ると、確かに……。棒のような、骨がある。とりあえず、報告せねばと、と大声で叫んだ。

「Ｄｉｓｃｏｖｅｒ！」

他の隊員たちが駆け寄ってきた。輪になって、一人ひとり日本から持参した「毎日香」を手向けた。香煙がゆれてたちのぼる。歴史のなかの日本兵のなきがらに、５人は手を合わせた。

過去を忘れ去ってはならない

戦後六十年、日本はその痛手を忘れ去り、戦争とは最も遠い国として歩み続けている。戦争の過ちへの反省が、半世紀以上に及ぶ平和を作り出した。しかし、日本は戦争を知らない世代の時代になりつつある。過去の大きな苦しみから今の幸福を享受しているならば、私たちは決してその過去を忘れ去ってはならない。戦争を知らない私たちのできることは、過去を風化させることなく、常に反省しながら前を見据えることである。

中大探検部によるパラオ・ペリリュー島戦跡踏査。33ページにわたる詳細な計画書は、冒頭の「趣旨」をそう書き出している。

発案は、３年次探検部の主将もつとめた小林欧子さん（法学部４年）と、堀川智里さん（総合政策学部２年）の女性ふたり。「海外活動をしよう」と言いだしたのが小林さん、「ではパラオの戦跡踏査は……」と提案したのが堀川さん。昨年６月に、探検部会でこの戦跡踏査を発表し、参加メンバーを募った。

「甘えた感情を持った人は連れて

行かんぞ、って気持ちで発表してたら、はじめのうちは誰も来なかったんですよ。これはどうなることか、と」（小林さん）

ふだん、探検部の活動は山や川、鍾乳洞に行くというような「目的地モノ」が多い。きちんとした「調査モノ」の海外遠征は、「10年ぶりのプロジェクト」になる。それほど調査モノは大変だし、一面で部員たちに言わせれば「ダルイ」のだそうだ。さらに海外なので金銭問題もネックではある。

それでも3人が名乗りでた。前出の佐相さんに加え、探検部現主将の三好悠介さん（総合政策学部2年）と関直志さん（経済学部2年）だ。それぞれ企画に乗るか乗らぬか、けっこう悩んだようである。なんかおもしろそう、海外にも行きたいし……で、結局は「卒業する小林さんの餞（はなむけ）に。先輩の顔を立てて」と三好さん。02年12月に小林さんが「トイレで卒然と思いついた」企画は、年明けて半年後にメンバー結成、それからみなで行動計画を練り上げて年明け1月のパラオ行まで、2年をまたいで結実したわけである。

「Discover!」。山中深く戦跡踏査する中大探検部員たち

太平洋戦争・最激戦の島 平和な光景と封印された時間

いまはダイビングで有名な観光地として知られるパラオ諸島。日本から南に約３０００キロ。大小３００余りの島々から成る。総面積４８８平方キロは日本の屋久島とほぼ同じ。空と海が溶け合う、緑の楽園。多くの日本人がレジャーに訪れている。平和なおだやかな光景がひろがる。

そんな美しい島々の奥地はしかし、別の時間の中にある。半世紀を超えてなお時が停まったままのような。草深い山岳部には、先の大戦で戦死した何千という日本兵の遺骨が眠るのだ。激しい戦闘の跡、投げ出された幾多の遺品ともども、回収が進まないままに。島を死守防衛せんとする日本軍と上陸総攻撃にでた米軍の、そこは激戦の地であった。――そして日本軍玉砕。１９４４年9月15日から2カ月余にも及んだペリリュー島での戦闘は、なかでも最も激しく悲惨をきわめた、とされる(別項参照)。

戦後、「ペリリュー神社」が建立された。そこに、《この島を訪れる、もろもろの国の旅人たちよ》と始まる米・ニミッツ提督の碑文がある。

《あなたが日本の国を通過することがあらば、伝えてほしい。この島を死んで守った日本軍守備軍の勇気と祖国を憶うその心根を……》

ペリリュー島の悲劇を追う意味を、「趣旨」はこう続けている。

……探検の意義が世界の発展であるならば、過去という既知の中の「未知」を再発見して過去を残しとどめるということも、前進する未来への大きな足がかりとして取り組むべき

ペリリュー島戦史

日中戦争が泥沼化するなかで、日本は1941年12月真珠湾攻撃で米＝連合国との太平洋戦争に突入した。香港、マレー半島、フィリピン、ビルマ等を一気に占領、優位に立ったが、42年6月ミッドウェー海戦大敗で主導権は米に移り、戦局は連合国優勢となりつつあった。

パラオ共和国は地勢上、日本にとっては南方戦線の主要拠点・フィリピンの防波堤、米国にはグアム・サイパン攻略の後方支援拠点として極めて重要な位置を占めていた。

ペリリュー島攻略。米軍が上陸攻勢の戦端を開いたのは44年9月15日である。当初、

守備する日本軍約9000名

米軍約29000名

兵力、火力において圧倒的な米軍の上陸を、日本軍は2度まで阻止したが、以降山中の壕にこもり熾烈な持久戦を展開した。が、11月18日には戦闘員150名に。そして同24日――指揮官以下玉砕した（その命が届かぬまま、八十余名は戦闘を継続、最後の生存兵が

ことであろう。……ペリリュー島に残されている多くの戦跡を再発見し、写真や地図に残す。ペリリュー島の悲劇を追うことで、過去を顧み、現在そして未来と向き合っていきたい。

ハードルを越えて

何十回にもわたる会議、地雷や戦史についての勉強会、プレ合宿としての西表島密林探索訓練（03年10月30日―11月3日）もやって、探検部5人は04年1月29日パラオへ出発した。

成田発11時5分。グアム経由でパラオの首都コロール島に21時40分到着した。翌日から3日間は現地で渉外活動。戦跡調査を行うにはパラオ政府の文化省芸術文化局とペリリュー州政府からの許可が必要なのだが、じつは文化省への申請が遅れたためその返答がまだもらえていなかったのだった！　さっそく文化省へ行って交渉を開始する。渉外担当の堀川さんは「英語がんばりました。ものすごい繰り返し聞いた」。係の人に「日本語しゃべれなくてごめんなさい」とまで言われてしまった、そうだが。

熱意が通じたか、許可のほうはあっさり「OK」。ハードルを1つクリアして、日本大使館専門調査員の三田貴さんや、コロールで生物研究をしている倉田洋二氏、中大海洋研究部OBの遠藤学さんを訪ねた。小林隊長はふりかえる。「今までの探検部の活動と今回は明らかにちがう。それは自然相手でなく、人間相手ということだ。ここまで多くを巻きこんで、失敗という結果はあってはならないと、とみなで確認しました」

遺骨が眠る…1ヵ所にかたまって発見された

コロールの南、約50キロメートルに位置し、面積約13平方キロメートルの小さな島、ペリリュー。隊員がこの島へ移動したのはパラオに到着してから5日めだった。「真っ青な海を見ながら、これからの3週間という日々を思うとなぜか緊張する」。

佐相さんは報告書にそう記していた。これからどんな日々がまちうけているのだろうか……。

ペリリュー3日め（2月4日）。いよいよペリリュー島調査活動が始まった。以後2日間の休息日をはさんで16日間、毎朝6時に起き、午後3時まで調査活動が続いた。活動目的は以下の4つ。

① ペリリュー島全域にお

投降したのは敗戦後27年4月だった）。

「3日で終結」と見込んだ上陸作戦からじつに2カ月半、他にない長期戦と多大な損害（死傷者1万名以上）を強いられた米太平洋艦隊・ニミッツ提督は『太平洋海戦史』のなかで「この島を死んで守った日本軍守備軍の勇気と祖国を憶う心根」をたたえ、現在ペリリュー神社の碑文に遺る（本文参照）。

西海岸は「オレンジビーチ」と呼ばれるが、真っ青な珊瑚の海が米兵の血で染まった激戦の記憶に由来する。米軍による命名である。

けける戦争遺跡（洞窟陣地、機器、遺品、遺骨等）の発見

② 戦争遺跡の撮影、記録

③ 戦争遺跡の所在地確定、地図へのマーキング

④ 国内における報告会、遺骨収集事業への貢献

遺骨、遺品、銃……

言葉では分かるけど、実際に探検をしたこともない者にとっては具体的にどのように遺骨収集するのか想像もつかない。一体どんなふうに行うのですか？

「基本的には密林に覆われている山の中から一定の捜索方法で土壕を探して、発見した隊員がその壕の中に入ります。他は外で待機。そして遺骨を見つけたら『ディスカバー』と叫んで他の隊員が駆けつけるんです」と、小林隊長。平気な顔でおっしゃるが、1人で入るって……怖くないんですか？と、100人ぐらい入れそうな大きな壕を想像して聞いたら、「大小いろいろあるけど、やっと匍匐（ほふく）前進できるぐらいの壕がほとんどだった」そうだ。

今回、戦跡踏査を行ったところは水戸山、電探台、ブラッディ・ノーズ・リッジ、中ノ台、ガドブス島の5カ所。遺骨は下あごと大腿骨、歯など計7点見つかった。遺骨の発見は少ないが、代わりに「不発弾や水筒、ヘルメットはいくつもあった」という。これらの遺留品や土壕、砦、銃、弾丸もすべてGPSで位置確認してマーキングする。隊員5人が、岩山の尾根から麓までを、等間隔で横並びになり、ひたすら下を向き端から端まで捜索。ときには同じ場所を、行ったり来たりもしながら。何か発見するたび、呼び出される写真係・佐相さんと記録係・堀川さんは「そりゃもう、大変だった」とか。

「続けるうちに」と三好さんはこんな気持ちも吐露した。「わかっていたけど調査活動ってダルイんだよねぇ。緊張が続かない」。小林隊長も「みんな疲れてて捜索指示を出すのがつらかった」と。毎日が「同じような光景を見ている」日々。山の中である。当然ながら、ヤブが非常に濃いところでは木の枝が衣服に絡みつき出血する。「軍人とはいえ、よくこんなところで戦えたなって驚きが大きかったです」と小林さん。

食事はきちんととっているものの、疲労はたまり、つぎつぎ熱を出す騒ぎ。わずかに、隊長ひとり、「私は大丈夫でしたけど」。

隊長22歳の宴

ここで少し、メンバーのペリリュー島での食生活と住環境を紹介しておこう。

住環境についていえば当初はテントを張る予定だったが、ペリリュー州政府の高齢者のための施設（「シニア・シチズン・センター」）を1人1日3ドルで借りられることになった。電気、水道、台所、そしてトイレとシャワー完備。おかげで隊

員のペリュリューでの生活は格段に過ごしやすくなったらしい。

食事は主に自炊。金銭面とともに栄養的にも不具合が生じないようにある程度の食材は日本で準備し持ちこんだ。米50合、即席ラーメン25人前、カレールウ3箱、クリームシチュールウ・ビーフシチュールウ各2箱、味噌、カットわかめなど。現地では主に野菜を購入。毎日ビタミン剤を服用しながら、野菜をとるようにしていたそうだ。その結果、腐りにくい根野菜が主流となるので、「ジャガイモ・タマネギ・ニンジンのオンパレード」。けれど、外食したり、現地の人から食事の招待を受けたり、果物をもらったりと、「合宿中とは思えないくらい栄養的に充実していた」らしい。パラオの主食といえばタロイモやタピオカだが、レストランではジューシーなハンバーグや大陸級ステーキ、中華料理、韓料理、タイ料理なども食べられる。

お世話になった現地の人たちと。
右から２人め、ボールを手にするジロー君

しかし何といってもホテル「ストリーボード・ビーチ・リゾート」での食事が隊員にとって思い出深いようだ。ここは、ペリリュー出身のダイバーガイド、ガドウィン氏（この人、女性隊員の目には「パラワンで1番ハンサム！」。ちなみにパラワンとはパラオ人のこと）と、石川県出身の気さくな日本人の奥さん、まゆみさんが手作りで切りもりしているホテル。ガイドブックで「まゆみさんの料理は絶品である」と書いてあったのを見つけた小林さんと堀川さんが、あらかじめ食事のお願いをしていた。根回しがいい。念願かなったその日が、ちょうど小林隊長22歳の誕生日。誕生祝いをかねて、夫妻はもてなしてくれたそうだ。「こんな祝ってもらえたのは生まれて初めて！」と小林さん。みんなにとっても、現地の人々との食事は安らかな憩いのときだったにちがいない。ごちそうになったのは精神的にも肉体的にもつらくなってきた調査行程の中盤だったのだから、なおさら。

どんな「意義」があるのか
現地で激しく議論

実際、このころが戦跡踏査の胸つき八丁、大きなターニングポイントだったようである。

隊員それぞれがこの調査の「意義」を見失いかけて、思い悩んでいた。活動目的は前出の4項のようになっていたのだが、そもそもの「意義」についてみんなで突っこんだ議論をしたわけではなかった。戦争の遺物がころがるその現場で、「戦跡踏査」の内実を直接突きつけられた、といっていい。封印された時間の中に踏み入って、あるいは日本人のだれもが立ち尽くすだろう、重い問いでもある。

問いを問いつづける、その姿勢こそが重要だった、ともいえるだろう。「何の基準を持って、何が発見で、何が未発見なのかわからなくなってしまった」（小林さん）という、真摯な自問自答を含めて。

遺骨の発見自体はわずかだった。遺骨を捜しているのか、地図をつくりたいのか、戦争について知りたいのか。隊全体で行動する以上、隊全体の1つの意義に従って行動する必

要に迫られていた。今までの活動は「目的」になる目的地があった。ルートもまたおのずと決まってくる。しかし今回はその目的地が存在しない。目的地がない以上、「目的・意義」を自分たちで創造する必要があった。「自由という名の不自由さ」と、三好さんは表現する。みなで幾度となく議論し、お互いが見失いそうになる意義を補い合って活動を進めていった。

「遺骨を回収しないで」

遺骨のある場所を知っているジロー君と一緒に行くか、やはり独自で探索するか。今後の活動で、最も議論になったのはこのテーマだったそうだ。

ジロー君は13歳、やんちゃ坊主のパラワンだ。パラオではこのように純粋のパラオ人でも日本名を持つ人々が多数いる。ジロー君は、「ペリリューの生き字引」として知られていた太平洋戦争史の研究者で、慰霊のための活動をしていた故・中川束（つかね）氏の養子である。日本語もペラペラで、ペリリューの地形や戦争について知悉し、遺骨のある場所も知っていた。ジロー君はこう言ったという。

「遺骨を回収されたくない。日本人は遺骨収集をいいことだと思っているけど、僕にとっては、ここに遺骨があることで戦争を忘れないのだ」

ジロー君は遺骨がなくなるとこの島の価値がなくなると思っているらしかった。これまで考えもしなかった「日本人の目線」と、少年によって気づかされた「パラワンの目線」。

遺骨のありかを発表できない……。「発表できないなら、一緒に行ってもしかたない」という意見がひとつ。他方、「この調査は戦争について考えることが重要なのだから、できるだけ遺骨を見つけ、お線香をあげて追悼しよう」という意見がひとつ。隊全体の「意義」が問われていた。

議論の末に、「自分たちにしかできない方法で過去の戦争を伝えること」を隊としてもっとも重視した。その手段として遺留品の写真を片っ端から撮り、地図を作成し、報告会で発表しよう、と。ジロー君が遺骨のありかを知っていた大山の調査は難解な地形ですべてを網羅できそうにないこと、その場所に詳しい人は他にも多いという事情も勘案して、大山捜索はあきらめたのだった。

〝6番めの隊員〟と「ダァ…」

思い出はつきない。

「ラリー」という犬のこと。

ペリリュー島の犬は放し飼いで飼われている。到着してすぐ、エサをやったわけでもないのに中型犬のラリーはやたらなついてきた。活動から引き上げてきた隊員たちを見つけては宿舎までついてきて、翌朝活動に行くときもドアの前に。どうやら一晩中ドアの外で待ち続けていたらしい。その日はなぜか目的地の山までついてきた。お菓子をやってその隙にさっと山に入ろうとしても、ラリーは一瞬で食べつくしてしまう。諦めてその日は行動を共にしたのだが、ラリーは不発弾を平気で踏むわ、山から落ちるわ。隊員は「ラリーが不発弾を踏むたび、人生の終わりを感じた」とか。バカ犬。でもばかな子ほどかわいい。いつのまにか〝6番めの隊員〟となったそうである。

パラオは今日でお別れという日、あのアントニオ・猪木氏に遭遇したのだそうだ。ウソでしょ～と思うかもしれない。でもホントの話。

コロール島とペリリュー島とに挟まれるようにして「ロックアイランド」と呼ばれるところがある。ここはヤシの木だけ生えた島があるかと思えばマッシュルームそっくりの島、潮が引いた時だけ姿を現す砂の島まで、大小まちまち、形状とりどりの２００もの島から成っている。ロックアイランドを取り囲む海はエメラルドや水色、濃紺がまじり合って、

決して日本ではお目にかかれないような景観がつづく（実は記者も、かなり前にこの光景をテレビで見て以来、メールアドレスに「parao」を挿入するぐらいこのアイランドにほれ込んだ1人である。探検部より先に！）。

そんなロックアイランドの1つがイノキ・アイランドなのである。イノキは日本人観光客が珍しかった時代からパラオに足を運んでいて、パラオ人所有者から友好のしるしとして、名誉オーナーの称号を与えられ、私有地なので本来なら一般人ははいれないところをプライベート使用が許可されているという。この日も骨休みにパラオを訪れていたもよう。現地で一緒に「ダァ！」……まさか、それはなかったらしい。

パラオでいろいろなことに遭遇した隊員たち。まだ消化しきれないさまざまな思いを抱えて帰路についた。飛行機の窓から目をこらす。緑なすパラオの島々が遠ざかり、視野の向こうに小さな点となって消えた。約1カ月のパラオ滞在を終え、探険部5人は2月27日、成田に着いた。

厚労省「遺骨収集に役立てます」

最後に隊員の総括を紹介しよう。

「意見をもつこと、考えることが大事とわかった。その契機になった」と関さん。佐相さんは「戦争を知る機会が日本史の勉強や修学旅行でしかなくなっている。あるいは大学合格のための手段となっていたりと、危うい状況。今回の戦跡踏査は、そんなことを考える機会にもなった」と語る。「報告書をつくり、戦争のことを多くの人に知ってもらいたい」と抱負もこめて。

戦跡踏査を終えて――前列左から小林欧子さん、堀川智里さん、後列・三好悠介さん、佐相亮真さん、関直志さん

三好さんは現・探検部主将として「やっぱり今回の調査は社会的貢献度ナンバーワンだったと思う」という。実際に厚生労働省の係官から「調査マップは助かります。3月の遺骨収集に役立てます」と感謝されたそうだ。

この探踏の提案者である堀川さんは「ジローは小学生なのに戦争のことをよく知っていた。でも私自身、戦争に対して自分の考えをもってないままここに来てしまった。これからもっと知って考えていきたい」と。最後に小林隊長はこう話した。

「過去のことが埋もれ、時代だけが進む。大切なのは若者が平和呆けしないこと。学生でもここまでできた。すこしでも他の人の原動力になればいいと思います」

◇

今回の戦跡踏査の全体をまとめた活動報告書『ペリリュー島戦跡踏査』（中央大学文化連盟探検部発行）も刊行された。カラー表紙で109ページ。1冊1000円で頒布している。

また、探検部では11月の「白門祭」の期間中に、展示・報告会を予定している。

探検部のホームページアドレスは、http://www2.tba.t-com.ne.jp/aisenshifujioka/framepage5.index.html